

# TOKYO人権

誰もが幸せを実感できる社会へ

SUMMER / 2025  
Vol.106

発行 / (公財) 東京都人権啓発センター

自分を  
支えて  
きたもの





おもちゃ  
コーナーを  
リニューアル  
しました!

あそ  
遊びに  
おいでよ!

## 東京都 人権プラザ

TOKYO METROPOLITAN HUMAN RIGHTS PLAZA

東京都港区芝二丁目5番6号  
芝256スクエアビル 1階・2階

開館時間：9時30分から17時30分まで

休館日：日曜日、年末年始

入館料：無料



東京都人権プラザは、  
東京都が設置した人権啓発のための拠点施設です。  
人権について楽しく体験して学べる  
展示室、セミナールームや図書資料室などがあります。  
人権に関する相談も受け付けています。

(東京都人権プラザは、公益財団法人東京都人権啓発センターが  
指定管理者として管理運営しています。)

おもちゃコーナーが新しくなりました。

東京都おもちゃ美術館協力のもと、誰もが遊べる  
おもちゃをセレクトし、こどもから大人まで楽しめる  
「インクルーシブな空間」に生まれ変わりました。  
安全に遊べるキッズスペースをはじめ、おままごと  
コーナーやボードゲームもご用意しています。

また、授乳室やオムツ替えシート、休憩スペースも完備しており、  
小さなお子さま連れの方にも安心してご利用いただけます。  
ぜひお気軽にお立ち寄りください。



東京都が掲げる  
17の人権課題

- 女性 ● 子供 ● 高齢者 ● 障害者 ● 同和問題 (部落差別) ● アイヌの人々 ● 外国人 ● HIV 感染者・ハンセン病患者・  
新型コロナウイルス感染症等 ● 犯罪被害者やその家族 ● インターネットによる人権侵害 ● 北朝鮮による拉致問題
- 災害に伴う人権問題 ● ハラスメント ● 性自認 ● 性的指向 ● 路上生活者 ● 様々な人権課題 (順不同)

### YouTube / 公財・東京都人権啓発センター

主催事業等に関する  
動画をアーカイブし、  
YouTube の公式  
チャンネルで公開し  
ています。  
是非ご覧ください。



動画の一例

人権問題都民講座「認知症」との新たな出会い /  
人権問題都民講座「フェイク情報と人権～誰もが  
接することになる高度情報社会の中で～」 /  
沢知恵コンサート ありのままの私を愛して



### 公益財団法人 東京都人権啓発センター TOKYO METROPOLITAN HUMAN RIGHTS PROMOTION CENTER

〒105-0014 東京都港区芝2-5-6  
芝256スクエアビル2階  
TEL 03-6722-0082 (総務課)  
FAX 03-6722-0084  
<https://www.tokyo-jinken.or.jp/>



### 東京都 人権プラザ TOKYO METROPOLITAN HUMAN RIGHTS PLAZA



(公財)東京都人権啓発センターは東京都人権プラザの指定管理者です。

目次 CONTENTS

3 INTERVIEW

## 苦しみがく自分の奥底に在る思いを 五行詩に込める

いわざき わたる  
詩人 岩崎 航さん



7 きみは、知ってる？

平和につくした医師

なかむら てつ  
中村 哲

8 人権キーワード解説

## 「障害」って何？

人権カルチャーステーション

## 『アイの歌声を聴かせて』

すがわあきこ  
[評者] 横浜国立大学教授 須川亜紀子さん



9 特集

## 「障害の社会モデル」が導く共生へのヒント

— 社会のあり方を問い直す視点から —

10 JINKEN note

## 外国にルーツのある 高齢者が抱える課題

— 母語・母文化への回帰 —



毎週土曜日  
放送中！



まとめて！  
土曜日

毎週土曜日 朝 7時～9時

(公財)東京都人権啓発センターでは、身近な人権をテーマとして、リスナーに分かりやすく取り上げる人権啓発ラジオ番組を提供しています。

人権  
TODAY

最近の放送テーマ 高齢者が働く、地域交流の場／高層マンションの街・武蔵小杉の地域防災のこれから／[大学進学におけるジェンダーギャップ白書]

番組名 ● 人権TODAY「まとめて！土曜日」内のコーナー  
放送局 ● TBSラジオ FM90.5MHz / AM95.4kHz  
放送日時 ● 毎週土曜日 朝8時22分頃から5分間  
キャスター ● 藤森祥平さん、北村まあささん ほか





Interview

# 苦しみもがく自分の 奥底に在る思いを 五行詩に込める

詩人  
岩崎航さん  
いわざき わたる

筋ジストロフィーが  
発症した頃のことについて  
お聞かせください

筋ジストロフィー<sup>※1</sup>は、全身のあらゆる  
筋肉を正常につくることができず、筋力  
が低下していく遺伝性疾患の総称です。

私の場合、3歳くらいで発症している  
ので、発症前後の記憶が定かではないの  
ですが、幼少期は転びやすかったものの、  
普通に歩く、座る、立つことはできてい  
ました。私には7歳上の兄がいて、その  
兄が既に筋ジストロフィーを発症してい  
たため、親が「もしや」と思って私を医  
療機関に連れて行き、私も兄と同じ病で  
あると診断されたと聞いています。とは  
言え、私自身がこの病を正しく理解する  
のはずっと後のことで、幼少期に親から  
病について説明されたことはありません  
ですから、子ども時代は「自分は足が悪  
いんだな」という理解でした。

親の方針もあって、小中学校は地域の  
公立学校に通っていました。階段は手す

風にあたり陽の光を浴びる。  
これも「生活」ですよ？  
重い障害があっても  
当たり前の「生活」ができるよう  
介護業界の人手不足が  
解消されてほしいのです。



りを使ってよじ登る必要があったし、運動会ではいつも最下位でしたが、そういうことが「嫌だった」というよりは「肩身が狭い」という気持ちでした。同級生たちにとっても、私は「足の弱い少年」という認識だったでしょう。良くも悪くも過剰に特別扱いをされることはなく、割と穏やかに、子どもらしい日々を送っていたように思います。

同じ病のお兄さまは  
どのような存在でしたか？

兄の様子を見てはいましたが、小学校の低学年のころは、それが自分に直結していなかったんです。成長とともに自分の体が思うように動かなくなっていく中で、徐々に「自分も兄と同じ病気なんだな」と理解を深めていく感じでした。

兄も地域の公立中学校に通っていたのですが、特徴的な歩き方で「やつと歩いている」状態だったために、苛烈<sup>かた</sup>ないじめに遭っていたようです。当時の私は幼すぎて、兄の苦しみに気づくことも、理



## いわさき・わたる

詩人。1976年、仙台生まれ。本名は岩崎稔(みのる)。3歳頃に症状が現れ、翌年に進行性筋ジストロフィーと診断される。現在は胃ろうからの経管栄養と人工呼吸器を使用し仙台市内の自宅で暮らす。20代半ばから短詩に関心を持ち、2004年秋より五行歌形式での詩作をはじめ、2006年に『五行歌集 青の航』を自主制作。著書に、詩集『点滴ポール 生き抜くという旗印』、エッセイ集『日付の大きいカレンダー』、兄・健一との共著、画詩集『いのちの花、希望のうた』、第2詩集『震えたのは』(いづれもナナロク社)を刊行。

Twitter : iwasakiwataru

公式サイト



解することもできていませんでした。その後まもなくして歩くことも立つこともできなくなった兄が、そのもどかしさを母にぶつけているのを見たことがあるんです。「もうこんな足なんかいらさない！」と悲痛な声で訴える兄の姿を断片的に覚えていたのですが、それに比べると、私は兄が通った道よりも少し楽な道を進めたように思います。もちろん私も歩けなくなる、立てなくなる、そういう現実を突きつけられたときはショックを受けましたが、私の場合は、もう一方で「これからは転ばずに済む」といった思いもあつたんです。兄の姿を見ていたから、自分の中に鬱積<sup>うっせき</sup>していくものを、自力で消化していく助けになったのかもしれない。

## 岩崎さんの暮らしに

「今、必要なこと」とは？

今、私は24時間絶え間なく人工呼吸器

をつけ、食事は胃ろうといってお腹に開けた小さな穴から、胃に直接チューブを通しています。ベッドの上で生活をしており、何をすることも介助が必要です。以前は両親の介助で暮らしていました

が、このままではいざれ限界が来ると思い、公的な介助を利用することにしました。両親が80歳近くになった2018年頃には毎日24時間ヘルパーさんの介助で暮らすようになりました。ただ、私の体は少しでも無理な動かしかたをすると筋肉を傷めてしまうので、介助の難易度が高いこともあり、介助体制の維持だけでも「綱渡り」に近い現状なんです。「もしヘルパーさんが欠員状態になったら」もし代わりに入れるヘルパーさんがいなかったら、そんなことを考え出すと追いつめられてしまいます。

「生活」には、「風にあたり陽の光を浴びたいな」とか「気晴らしに散歩をしたいな」とか、そういうことも含まれますよね。けれど、今の私にはそんな願いも



青空のもと外出をする。

そんなささやかな日常を航さんは日々、待ち望んでいる



※1 筋ジストロフィーがもたらす主な障害としては、運動機能障害(歩行が困難になる)、呼吸機能障害(息苦しさ、肺炎のリスクが高まる)、心機能障害(心不全や不整脈の発生リスクが高まる)、嚥下機能障害(唾液や食べ物を飲み込むことが困難になる)などがありますが、発症年齢や重症度には個人差があります。根本的治療法は現在のところありません。

## 苦しみは

一人で抱え込まずに誰かに話すといい。  
共感してくれる人の存在は  
自分の生きる力になるから。



『点滴ポール  
生き抜くという旗印』  
写真：齋藤陽道、2013年、  
ナナロク社  
岩崎さんの第一詩集。  
谷川俊太郎さんをはじめ  
多くの方から高い評価を  
得る。

なかなか叶いません。外出時には寝台型の車いすを使用するのですが、介助には2人のヘルパーさんが必要となり、人員を確保するのがとても厳しい状況にあります。仮に、なんとか確保できて、外出の日が雨だったりすると、待ち望んでいた機会は流れてしまいます。「じゃあ、明日にしましょう」というわけにもいかず、また、いつになるかわからない「人員確保できる日」を待たなくてはなりません。

今の私に必要なものは「安心できる生活」です。つまり「安心できる24時間介助の体制」です。制度的には「24時間介護の支給量（外出時等の2人介護分を含む）」を行政に認めていただいているのですが、人手が不足していれば、その支給量をフルで受けることが難しいのです。人手不足の解消に向けて、自分でもできることをしようとSNSでヘルパーさんを募集しました。その甲斐あって、1人のヘルパーさんとなることができましたが、24時間介助の体制が手薄な状

況であることに変わりはありません。何がすぐ変わるわけではないけれど、介助なしには生きられない自分の状況や思いを発信することは続けていきたいと思えます。

第一詩集『点滴ポール』は  
大きな反響を呼びました。

五行詩を詠み始めたのは2004年、私が25歳の時です。学校に通っていた頃よりも、体がかなり不自由になり、行動範囲が狭くなり、その結果、人との関わりも激減していきました。あまりにも一人の時間が長すぎて、人と関わることに恐怖を感じるような時期もあつたくらいです。けれど、自分がどんなに努力をしても変えられないことがあります。自力でも他力でもどうにもならない。そんな無力さを思い知らされると、自分はどう生きていくのかってことを、いやおうなしに考えさせられるわけです。ときに気持ちに倒れてうずくまる。その気持ちを

青春時代と呼ぶには  
あまりに  
重すぎるけれど

漆黒とは  
光を映す色のことだと

『点滴ポール』より

また「生きる」というほうへ必死に立て直し、立て続ける。そんなふうには葛藤し、苦しみがく自分から洩れ出てくる思いを言葉にしたものが五行詩です。

2013年に『点滴ポール 生き抜くという旗印』を上梓してからは、それを介して人との出会いや関わりが生まれ、その関わりの中で励まされることも増えました。自分の苦しみや悩みを腹を割って話せる人もできたり、生きたいと思わせてくれる大切な人に出会うこともできました。五行詩を書くことは、私が人と

繋がって生きてゆくための営みになって  
いるのだと思えます。  
未来に向けて  
思うことや望むことは？

法律や社会制度を変えることで、改善できる社会課題はたくさんあるのに、そういうことって遅々として進みませんよね。私に関して言えば、訪問介護や医療的ケアを受けることが生命に直結しているにも関わらず、介護業界の人手不足の状況は一向に変わりません。家族の有り無し、運や偶然に左右されずに、障害のある当事者が社会的な支えを得ながら「自分らしく」生きていける世の中になつてほしいです。

50年前、100年前に比べれば、障害者の人権の状況は劇的に変わっています。障害者が見向きもされなかった時代から、様々な制度が整ってきました。先人たちが勝ち取ってきたものの恩恵を、私も受けながら生きているのは事実です。でも、

\*2「支給量」とは介護サービスを受けるために必要な時間や回数を指すもので、支給量は利用者の障害支援区分や生活環境、介護の必要性を個別に勘案して決定される。

まだ足りない部分がある。そう考えると、自分の困難を憂えずに済む時代にたどり着く前に、私もまた「生きて闘った人たちの層の一人」になるのかなと思うこともあります。

今、私は49歳です。医療環境が整うことで、この病気でも50歳を過ぎても健在の方がいます。せめて私が生きている間に、必要な手助けがあれば自分で人生を作っていける社会に変わる「兆し」だけでも見えてきてほしい。大切な人のため

### 鼻マスクをつけ

蛇管<sup>だかん</sup>をつけ

ほらほら

眺めてみると

小さなゾウさん

『震えたのは』より



岩崎さんの兄で画家の健一さんが花の絵を描き、航さんが詩を添えた『いのちの花、希望のうた』(ナナロク社)もまた読む人に大きな感動をもたらしている。

に長く精一杯生きていたい。できることなら、両親を見送りたい。そういう思いもあって「60歳まで生きる」と詩集『震えたのは』に記したのである。そうは言いながら、追い詰められてしまうこともしばしばで、その度になんとか踏ん張っているというのが本当のところだ。

岩崎さんの

「生きる」原動力はどこから？

苦しみに抗おうにも力が湧かず、自分一人で抱えこみ、否定的な想像に翻弄<sup>ほんろう</sup>され、自分でも「ちよつとまづいな」っていうレベルまで落ち込んでしまうことは今でもよくあります。そういう時に、信頼できる誰かに自分の気持ちを聞いてもらうと楽になります。聞いてもらったところで、自分が直面している状況は何も変わらないのですが、少なくとも自分の苦しみを理解し、共感し、「一緒に何とかしよう」と同じ方向を向いてくれる人の

存在は私の生きる力になる。そういう意味では、五行詩を讀んでくださった方々からの感想も私の大きな力になっています。もし五行詩を書いていなかったら、私の世界は狭いままだったし、もしかすると今日まで生きられていないかもしれない。

介助や医療的ケアを受けながら「生かされている」という日々ではなく、自ら話し、自ら人に会い、自ら動くことで「生きていく」感覚を得ることが、「生きる」力につながっていくのだと思います。

今、何かに悩んでいる人に伝えたいことはありますか？

私は絶望の淵に追い詰められたときに、自分の心の奥底から出てきた言葉で自分を支えることで、生きてこられたとも言えます。また、五行詩に共感してくださる方々の存在に救われてきました。だ

からといって、遠観したようなことは一切なく、今だって、尽きることはない不安や苦しみで、もみくちゃになりながら生きています。人それぞれ悩みや葛藤があると思いますが、なんとか踏ん張って「自分の人生を全うする」という気持ちを持ち続けていただきたい。これは私自身への言葉でもあります。

私にとっての「幸せ」は、特別な出来事や特別な状況のことではなく、今日という一日を無事に過ごせることです。「つつがない一日」をつくり、積み重ねていくなかで、自分を前に進めていく気持ちが生まれていくものだと思います。けれど、つつがない一日を送ることができずに困っている人が社会にはたくさんいる。ですから、そういう人たちを支える仕事や役割を担っている人がもっと大切にされる世の中であってほしいと切に願います。

インタビュール勝一(東京都人権啓発センター専門員) / 編集那須桂 / 撮影表紙2〜6ページ 齋藤陽道



### 『震えたのは』

挿画：岩崎健一、2021年、ナナロク社

岩崎さんの第二詩集。兄、健一さんの花の挿絵が配されている。

きみは、  
知<sup>し</sup>ってる？

へい わ  
平和につくした  
い し  
医師

なか

むら

てつ

# 中村 哲



い し なかむらてつ  
医師の中村哲さんは、アフ  
ガニスタンで病気の人を助け  
ながら、戦争や日照りで苦し  
む人々の命を守るために、病  
院で治療するだけでなく、農  
業ができる環境をつくること  
にも力をそそぎました。

こんかい  
今回は、

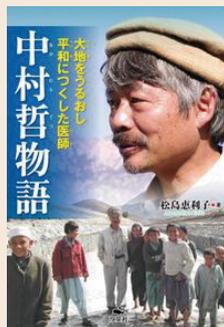
へい わ  
平和をつくるために  
かつどう なかむらてつ  
活動した中村哲さん  
について紹介します。



み ちか  
身近にあってできる事は、  
あんながい  
案外たくさんある。  
たとえば友だちがいじめら  
れているのをかばってやる。  
かぞく びょうき  
家族が病気になったときか  
わりにご飯を作る。  
ほん つく  
そういう、小さな一つ一つ  
が、何でもないようなこと  
が人間の真心。それをじっ  
と守ることが大事なんだ。

なかむら  
中村さんは、医師として病  
気の人を助ける仕事をしてい  
ました。しかし、水不足や飢  
えで命を落とす子どもたちを  
前に、医療だけでは救えない  
と考え、井戸を掘り、用水路  
をつくりました。砂漠に水を  
引いて農地をよみがえらせ、  
65万人の命を救いました。  
戦争や干ばつが続く土地で、人々が  
人間らしく生きられるよう力をつくし  
ました。2019年、中村さんはアフ  
ガニスタンで何者かに襲われ、亡くな  
りましたが、彼が作った用水路は今も  
現地の人々をささえ続けています。  
日本は今年で戦後80年を迎えます。  
世界では今も貧困や戦争で多くの命  
が失われています。中村さんの行動は、  
身近な人を守ることに同時に、遠くの  
人の命も守ることの大切さを教えてく  
れます。

もっと  
知りたい  
ときは



だい ち へい わ い し  
『大地をうるおし平和につくした医師  
なかむらてつものがたり  
中村哲物語』

まつしま えり こ ちよ ちよぶんしゃ ねん  
(松島恵利子 著/汐文社/2022年)



# しょうがい 障害って何？

# 解説 人権 キーワード

このコーナーでは、聞いたことがあるけれど、わかりにくい人権に関連するキーワードを解説します。

人にはそれぞれちがいがあり、得意なことやできないことがあります。体や心の状態と社会の仕組みがうまく合わず、できないことが生じることを障害と呼びます。障害は、その人のせいではなく、社会の中のバリアが、生活に不自由を生じさせることで生まれるものです。

人には全員に人権があり、みんなが同じように学び、働き、暮らす権利があります。でも、それを難しくするバリアがあります。例えば、意見をきちんと聞かれなかったり、制度が十分でなかったりすることです。

誰もが暮らしやすい環境をつくるために、みんなで一緒に考え、ルールや仕組みを工夫していくことが大切です。



## 人権カルチャーステーション

「人権の視点」をもつことで世界の見え方が変わる

### 「アイの歌声を聴かせて」

#人権 #ロボットの人権 #ジェンダー

#### ロボットとの共存時代がやってくる

もしAIアンドロイド（AI搭載の人型ロボット）がクラスメイトだったら？—そんな夢物語も現実味を帯びてきている。本作品は、近未来の高校生たちのとまどいと友情を描いている。主人公サトミは、ごみ処理ロボットにも優しい高校生。ある日転校してきた少女シオンに「今シアワセ？」と聞かれる。実はシオンは、サトミの母が開発したAIアンドロイドで、人間社会での実証実験のためにサトミの

クラスに送り込まれたのだった。サトミたちと過ごしながら、「トモダチ」や「シアワセ」の概念を学んでいくシオン。しかし、母のライバルの陰謀によってシオンは命令以外で動く危険な機械として廃棄されそうになる。ロボットに人権はあるのか、人間との友情は可能かという問いは、そのまま自分とは違う他者への人権意識や、他者と私たちの間の関係に置き換えて考えることができるだろう。



©吉浦康裕・BNArts / アイ歌製作委員会

原作・脚本・監督 / 吉浦康裕

上映時間 / 108分

配給 / 松竹

公開 / 2021年

評者

須川 亜紀子(すがわ・あきこ) 横浜国立大学教授

アニメ・漫画・2.5次元舞台などのオーディエンス/ファン研究。『2.5次元文化論:舞台・キャラクター・ファンダム』(青弓社、2021年)『2.5次元学入門』(青土社、2024年)など。

Series-8  
中高生向け  
ANIME  
レビュー

# 「障害の社会モデル」が導く 共生へのヒント

— 社会のあり方を問い直す視点から

障害者が直面する困りごとを、本人の能力や特性に起因する「個人の問題」とするのではなく、社会や環境に起因すると捉える考え方、それが「障害の社会モデル」です。公益財団法人日本ケアフィット共育機構で経営企画室室長を務める佐藤雄一郎さんに、このモデルの意義と実践について伺いました。

## 「困っている人のせいにしない」

視点

「少し前まで日本では、障害を『個人の問題』と捉える『個人モデル』が主流でした。しかし、『社会モデル』では、障害は社会や環境のあり方にあると考えます」と佐藤さんは説明します。「例えば、段差があつて車いす利用者が店に入れない場合、それは『足が動かないから』ではなく、『段差のある設計に問題がある』と社会



佐藤 雄一郎さん

モデルは捉えます」。

この考え方は、2006年に国連総会で採択された「障害者の権利に関する条約（障害者権利条約）」の中でも示されており、日本は2014年にこの条約を批准しました。そして2016年4月から



バリアフルレストラン

施行された「障害者差別解消法」も、この社会モデルに基づいています。「こうした考え方は、徐々に浸透してきています」と佐藤さんは話します。

## 合理的配慮の義務化と誤った認識

「2024年の法改正により、社会モデルに基づいた合理的配慮の考え方が広がり、民間企業にもその義務が課されました。これを受けて、研修やマニュアル整備を始める企業が増えていきます」と佐藤さんは語る一方、社会全体への広がりには十分ではないと感じています。「中には、『障害者が優遇されている』といった誤解も根強く残っている」と言います。

こうした誤解を解くために、同機構は「バリアフルレストラン」※を企画しました。この企画では、車いす利用者が多数派という設定の中で、立って歩ける人が「不便さ」を体験できるように設計されています。社会が車いす利用を前提としているため、椅子がない、天井が低いなどの演出により、「社会の設計に偏りがある」ことを実感する参加者が多く、「初めて障害のある人の困難を理解できた」との声が寄せられている」と佐藤さんは言います。

## 偏りに気づくところから始まる

「障害がないことを前提につくられた制度や組織文化には、一定の偏りがあるとも言えます。例えば、ある人が、仕事

ができない状況にあるとき、それは必ずしも本人の能力の問題ではなく、能力を發揮できる環境が整っていない可能性もあります。社会モデルの視点から見ると、社会や環境に原因があると考ええることで、改善の可能性が広がります」と佐藤さんは指摘します。

## 誰もが持つマイノリティ性

社会では、「誰もが何らかのマイノリティ性を抱えている」と佐藤さん。左利きや介護中の人なども、社会の設計によつては不利な立場に置かれるとしつつ、「合理的配慮」は、社会的障壁を取り除くための「調整」です。加齢によつて心身機能が低下していく超高齢社会では、社会的障壁は誰もが関わる問題であり、それらを取り除くことは障害の有無にかかわらず、多くの人に役立つものです。障害のある人は特別な存在ではありません。誰もが将来抱えるかもしれない困難を先取りしているだけなのです」と佐藤さんは説明します。

社会モデルの視点から、制度や意識などの障壁や偏りに気づき、それを改善していくことは、すべての人にとって生活しやすい、より良い環境づくりを推進するものとなります。

インタビュー・執筆 吉田 加奈子

(東京都人権啓発センター 専門員)

※「バリアフルレストラン」の取り組みについて <https://dare-tomo.team/barrierful-restaurant/>

# JINKEN note

多文化共生の高齢化と向き合う  
取り組み

外国人

## 外国にルーツのある高齢者が抱える課題

### ― 母語・母文化への回帰



「外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト」の  
介護通訳を養成する講座の様子  
写真上は、代表の木下 貴雄さん

通が課題となっていることに注目し、公益財団からの助成金を基に、2015年から2年間、介護通訳者の養成と派遣を行いました。「外国人高齢者が介護保険サービスにアクセスでき、介護施設の受け入れ体制を整えていくためには、こうした取り組みが不可欠ですが、さらに、継続的な支援に  
つなげる必要があります。今後も、母語以外でのコミュニケーションが困難になる外国人高齢者の増加が予想されます。多言語・多文化ケア支援に精通する人材の育成とともに、公的支援として活用できる仕組みが必要」と木下さんは話します。

### 安心して老後を暮らせる 地域社会を目指して

外国人高齢者が、尊厳を保ちながら自立した生活を送るためには、「外国人も日本で高齢期を迎えることがある、そしてそのような人は自分の周りにもたくさんいる」と知ることが大切です。外国人を一時的な滞在者と見なすのではなく、日本人と同じ様にライフステージを過ごしていると捉える必要があります」と木下さんは強調します。「文化や宗教・価値観の違いなどを知り、相互理解を心掛け、次の世代につなげていくことが、誰もが安心して老後を暮らせる地域社会にとって重要です」と、木下さんは語りかけています。

外国人人口の増加に伴い、在住外国人の高齢化問題への対応が急務となってきました。外国にルーツを持つ高齢者（以下、外国人高齢者）の中には、日本語での意思疎通が難しかったり、制度の仕組みが理解しづらかったりすることで、適切な介護支援につなげられず、困りごとがあっても本人や家族で抱え込み、状態が深刻化してしまう人も少なくありません。外国人高齢者の抱える様々な課題への支援を行う「外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト」(本部：名古屋市長代表の木下 貴雄さんに、詳しくお話を伺いました。

### 母語回帰を支える支援の輪

外国人高齢者の中には、母語以外に習得した言語を認知症の進行とともに忘れ、母

### 求められる継続的な支援

同プロジェクトでは、言語による意思疎

語しか話せなくなる現象が見られることがあります。木下さんは「幼年期の記憶は鮮明である一方、後から学んだ言語を忘れ、母語のみを話す傾向を『母語がえり』<sup>※1</sup>と呼ぶことがあります。日本語によるコミュニケーションが困難になることで、適切な対応が遅れ、問題が深刻化する恐れがあります」と指摘します。

このような課題に対応するため、同プロジェクトでは、在住外国人向け「認知症サポーター養成講座」を開き、支援ボランティアの育成に取り組んでいます。こうした勉強会を通じて、認知症に関する理解を深め、支援の輪を地域に広げています。

母語回帰を含む高齢者の介護に関する相談は、各市町村が設置する「地域包括支援センター」にお問合せください。

※1 中国語に特化した介護通訳の養成と派遣、外国人への介護制度の周知等、行政・関係機関等に対する外国人の介護・終活問題に関する啓発活動の3つの事業を行っている。  
※2 パイリンガル話者における認知症の特徴と見られており、味覚などを強く求める母文化への回帰も見られる。「母語がえり」は医学・学術分野で用いられている用語ではなく、介護現場などで通称として使用されている。

# EVENT 人権啓発行事のご案内とお知らせ

東京都人権プラザは、東京都が設置した人権啓発のための拠点施設で、公益財団法人東京都人権啓発センターが指定管理者として運営・管理を行なっています。また、アウトリーチ活動として、人権プラザ以外の場所でもさまざまな活動も展開しています。ぜひご利用ください。

## ● 出張展示

様々な人権課題

東京都人権プラザで実施した企画展の展示物などを東京都内の学校・図書館・官公庁などの施設に貸し出します。詳しくはお問い合わせください。



## ● 人権学習会

様々な人権課題

東京都人権プラザでは、学校や教職員、企業などの団体見学を受け入れています。専門員による展示の解説や体験学習、研修などのプログラムを用意しています。



## 特別展示

### 「セサミストリートの仲間たちと学ぼう！子どもの権利」

子供

人権を学ぶための基礎的な取組として、子どもの権利をテーマにした展示を実施しています。子ども・ユース世代を中心とした全ての世代が、子ども自身が持つ権利や「子どもの権利条約」について楽しみながら学ぶことができるよう、セサミストリートのキャラクターが学びのナビゲーターとなります。私たち自身が持つ権利を知ることから「人権」について考えてみましょう。

東京都人権プラザでの展示 ▶  
TM and © 2025 Sesame Workshop



展示

## 人権問題都民講座

### 「デフスポーツの魅力 —東京2025デフリンピック開催を控えて—

様々な人権課題



聞こえない・聞こえにくい人を取り巻く社会的障壁や言葉のバリアを取り除くことは、誰もがスポーツを楽しめる共生社会の実現につながります。本講座では、デフリンピック出場経験を持ち、デフスポーツの現場で長年活躍してきた講師から、デフリンピックの魅力や楽しみ方を伺い、聞こえる人・聞こえない人がともに歩み寄るためのヒントを学びます。誰もがが必要な情報や支援にアクセスできる社会について考える機会とします。

日時 2025年7月31日(木) 18:30 ~ 20:00  
講師 植松 隼人  
(サインフットボールしながわ代表兼コーチ)  
申込締切 会場:2025年7月23日(水) 正午  
オンライン:2025年7月28日(月) 正午  
開催方法 会場及びオンライン(Zoom)開催  
定員 会場60名、リモート参加は申込者全員  
(無料・要事前申し込み・会場参加は抽選)  
会場 東京都人権プラザ 1階 セミナールーム

※情報保障・託児についてはお問い合わせください。



【東京都人権プラザ(指定管理者:(公財)東京都人権啓発センター) 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル TEL 03-6722-0123】

## (公財)東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

問い合わせ

TEL 03-6722-0083 (公財)東京都人権啓発センター 企画広報課まで

皆様とパートナーシップを築き、人権意識の高揚、人権問題の解決に向けて、ともに手を携えてまいりたいとの趣旨から「賛助会員制度」を設けております。趣旨にご賛同いただき、是非ご加入下さい。

個人賛助会員 ー□ 2,000 円

団体賛助会員 ー□ 30,000 円



団体会員の皆様

(公財)東京都農林水産振興財団  
(公財)東京都中小企業振興公社  
(株)首都圏環境美化センター  
(一財)東京都人材支援事業団  
東京都中小企業団体中央会  
(公財)東京都障害者スポーツ協会  
(公財)東京都つながり創生財団

東京都下水道サービス(株)  
(公財)東京都歴史文化財団  
(一財)東京都営交通協力会  
(一社)東京都信用組合協会  
(一社)医療大麻dotオルグ  
(公財)東京都福祉保健財団  
(公財)東京都学校給食会

(一社)東京環境保全協会  
東京臨海高速鉄道(株)  
(株)東京エイドセンター  
(公財)東京しごと財団  
東京交通サービス(株)  
東京都人権啓発企業連絡会  
多摩都市モノレール(株)

(株)東京国際フォーラム  
東京都職員信用組合  
東京都商工会連合会  
(株)東京ビッグサイト  
(公財)東京観光財団  
(公財)東京税務協会  
東京都立大学法人

(公財)東京都交響楽団  
(一財)東京都弘済会  
東京都住宅供給公社  
自治労東京都本部  
東京食肉市場(株)  
東京港埠頭(株)  
東京都競馬(株)

(株)東京交通会館  
(株)ゆりかもめ  
(順不同)

## 編集後記

二つの詩集『点滴ボール』そして『震えたのは』を通して、岩崎さんの言葉は多くの人に感銘を与えてきた。と同時に、実はその言葉が岩崎さん自身を支え、自分を立て続けてきたのだと教えてくれた。「必要な手助けがあれば自分で人生を作っている社会」。それこそが「人権」という言葉が私たちに保障しようとしている社会の姿だと思った。(林)

誰もが幸せを実感できる社会へ

# TOKYO人権

Vol.106 2025年夏号 2025年6月30日発行(年4回発行)

制作 株式会社トライ  
発行 公益財団法人東京都人権啓発センター  
〒105-0014 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル2階  
TEL 03-6722-0085 FAX 03-6722-0084  
<https://www.tokyo-jinken.or.jp/>



マルチメディアDAISY版を作成しています。ご希望の方は(公財)東京都人権啓発センターまでお問い合わせください。「DAISY(デイジー)」とは、視覚障害などさまざまな理由で活字を読むことが困難な方のためのデジタル図書です。

この冊子は再生紙を使用しています。本誌の無断転載はお断りします。本誌を研修等でご利用の際は出典をご明記ください。